

子どもは豊かな遊びの世界を生きている②

あこがれに向かう力

河邊貴子

(大学教員)

子どもを動かす「あこがれ」

人の行動を引き起こす要因にはいろいろあるだろうけれど、子どもにおいて最も大きな動因は「あこがれ」という感情だと思う。少し前になるが、ディズニー映画「アナと雪の女王」がブームのころ、日本中の園で女の子たちが挿入歌に酔いしれていたことは記憶に鮮明である。「あこがれ」という語の古い形は「あくがる」で、その語源は「あく〓ある場所・がる〓離れる」。人間の身や心があるべき所から離れていくことを指すのだそうだ。「Let it go」を陶醉して歌っていた女兒たちの心は、あの瞬間、現実の世界から映像の世界に飛んでいたのだろう。差し出す手の先から雪が舞い、踏み出す足元から氷が広がると信じ切っているふうだった。私たち大人には見えないものが、子どもたちには見えている。

「あのようにになりたい」あるいは「あのようにやってみたい」というあこがれは、遊びにおける最大の動機である。子どもたちはあこがれの対象に熱中し、そのものを身の内に取り込もうとする。誰が「憧れ」という漢字を「心」と「童」で構成したかは知らないけれど、本当にその通りだ。

河邊貴子(かわべたかこ)

聖心女子大学文学部教授。専門は幼児教育学。主な研究課題は保育記録論、遊び援助論。医療と地域と子どもをつなぐNPO活動もライフワークの一つ。

熟達者へのあこがれ

ある幼稚園の朝。子どもの登園を迎える先生方の首には、けん玉がぶら下がっている。テラスにはさまざまな種類の、難易度が異なるけん玉が置かれていて、その横のCDデッキから音楽が流れている。登園直後、多くの子どもがそのスペースに集まってきて、けん玉を始めた。

彼らが挑戦しているのは「もしかめ」という技で、大皿と中皿の間を「もしもしカメよ♪」の音楽の最初から最後まで落とさずに往復できたら成功というものである。担任の先生はけん玉上級者で、「もしかめ」よりさらに速いテンポの曲に合わせようと練習中。先生のひざの使い方やしなやかな手の動きは子どもたちのあこがれの的である。園長先生はさらに上級者で、園長がやって来てけん玉を始めると、たくさんの子どもが周囲を取り囲む。横に並んで同じテンポで身体を動かしている子どももいれば、正面からじつと手元を見つめている子どももいる。ほとんどが五歳児だが、四歳児も交じる。四歳児の中には少し離れた場所で挑戦している子どももいるし、保育室の中でひっそりとけん玉との出会いを味わっている子どももいる。私はさまざまな子どもの姿を見て、レイヴとウエンガーが提唱した学習論を思い起こした。

彼らは、熟練者は教える存在ではなく実践共同体において最も十全的に実践に参加する存在で、そのことよって未熟者に対して、ああいう人になることという具体的な到達点を示すこととなる[※]という。レイヴらは、学習というのは個人の中に知識が蓄積されることではなく、社会文化的な実践に参加することそのものであり、次第に中心的な役割を担うことよってさまざまな価値を学ぶことであると考えた。子どもたちは熟達者にあこがれ、自らの技を磨こうとしていて、そ

の間にいろいろなことを学んでいるのだろう。けん玉の横にはお手玉もあり、けん玉の代わりに手のひらと甲の間で往復させる技に挑戦している子どももいる。三歳の男児がまねをするがうまくいかない。すると、五歳女児が三歳児の手のひらにお手玉を乗せ、その上から曲に合わせて自分の手でリズムを刻んでやっていた。

けん玉の行為自体を見れば個人内で完結する遊びかもしれないが、決して「一人遊び」ではない。伝統的玩具の持つ魅力、難易度の異なるけん玉や楽曲が用意されていて、それぞれの力量に合わせた挑戦が可能な環境設定。熟達者が近くにいること。これらが織り成されて活気ある状況が生まれ、その状況の中にあこがれが埋め込まれている。自分よりも未熟な者も近くにいることで、その者にどう対処すればよいかも学んでいる。あこがれの連鎖が、けん玉を集団の遊びとして成り立たせている。

「あこがれ」に向かう力を土台にして

けん玉やこまのように技能レベルが一目瞭然の遊びの場合、子どもは向かうべき具体的な到達点を定めやすい。この場合のあこがれは現実的なものといつてよい。「アナ雪」に見られたような虚構の世界に心が飛んでいくのとは、あこがれの質が少し違うように思う。前者はできること(= doing)へのあこがれ、後者はそのものになる(= being)ことへのあこがれと言い換えてもよいかもしれない。この両方のあこがれが、子どもにとつては大切なのだと思う。

後者のあこがれは幼児期ならではの遊びである「ごっこ」を生み出す。あこがれの何かになりきって遊ぶことで、子どもは「自分は何者にもなれる」と信じる種を心に宿すだろう。そして、

何かに熱中して取り組むことによって達成感を味わい、自己を実現していくだろう。

今、私の手元に『小平子ども劇場20周年記念誌』がある。子ども劇場というのは、文化芸術や遊びの体験を通して子どもと大人が共に育ち合うことを目指している全国組織であるが、この地域でも会員数が減る中で奮闘していて、小平地区も例外ではない。二十年という節目が輝かしい。記念誌には幼児から大学生までの子ども会員が「大きくなったら何になりたいか」という質問に答えていて、子どものあこがれの変化が透けて見える。「きんぎょ」と答えた二歳児は、金魚に興味があるのか、質問の直前に餌でもあげたのだろうか。「仮面ライダー」「白いロールパンナちゃん」と答えたのは共に三歳児。彼らは瞬間的にそのものになれる特技を持っている。「サッカー選手とバイオリニスト」と答えた年長児には、思わずエールを送りたくなる。この二つを職業として両立できると信じる大人はほとんどいないから。小学生になると、あこがれは職業として現実味を帯びてくる。例えば、「ピアノの先生」(小四)、「イラストレーター」(小五)、「保育士」(小六)。次第にあこがれと現実の可能性とを天秤にかけ始めるのだろう。「探し中」(十八歳)と正直なものもあるし、「ポロロッカ星人」(大学一年)と自分の真意をはぐらかしているものもある。現実にはどんどん厳しくなるようで、「命が狙われることのない平穏な生活をする」(大学三年)という回答には、彼が再びあこがれに出会えるようにと祈るしかない。

金魚や仮面ライダーになれると信じている幼児たちも、すぐに大きくなってこの大学生のように自分探しの迷路に入り込む。その時に彼らを支えるのは幼児期の遊び体験だと私は信じている。「あこがれ」に同化して遊び込むことのため込んだエネルギーが彼らを支えてくれるだろう。

注 レイヴ・J. & ウェンガー・E. 『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』佐伯胖訳 産業図書一九九三年